

## 世界遺産を掘る 第 3 回 — 東寺と空海 —

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 上村和直

### 1. はじめに

東寺と西寺は、平安京遷都と共に造られた双子のお寺ですが、東寺が空海に下賜されてから別々の道を歩み、東寺は現在まで法灯を保っています。境内で発見された遺構や瓦から、伽藍の様子や、その遷り変わりを辿ります。

### 2. 東寺と西寺の特徴 [図 1・2]

- \* 平安京内で二つだけの官営寺院。……国家的な儀式(法会)を行うことが目的。
- \* 位置は、平安京内の左右坊城の南端、南京極大路(九条大路)に南面する。構造は、寺内の南側四町が伽藍地、北側四町がバックヤード(政所・大衆院・倉垣院・修理所・花園院など)。
- \* 伽藍配置は、中心軸に南大門・中門・金堂・講堂・僧房・食堂・北大門・北総門、塔は南東部。
- \* 東寺では、文書が良く残る。……『東寺文書』・『東寺百合文書』・『教王護国寺文書』など。

### 3. 東寺と西寺の変遷 [表 2～4]

- ①平安時代初頭……両寺の創建は不明。承和年間(834～848)には中枢部が完成。  
塔は造営が遅れ、元慶年中(877～885)に造営。＝造営期間は約 90 年間。
- ②平安時代前期～後期……弘仁 14 年(823)空海に下賜。⇒真言宗の寺院となる。  
⇒その後、焼亡と再建を繰り返す。⇨後期には西寺は衰退、
- ③鎌倉時代初頭……文覚による修造・造営。⇨西寺は廃寺となる。
- ④鎌倉時代～室町時代……宣陽門院や天皇、幕府による寄進。  
⇒文明 18 年(1486)一揆のため多数焼亡。その後再建。
- ⑤桃山時代以降……文禄 5 年(1596)地震のため多数倒壊。その後の再建。  
\* 東寺の造営表 [表 1]

### 4. 東寺寺内での発掘調査の様子 [図 3・図 4]

- \* 伽藍地内の防災工事に伴う発掘調査……南大門周辺、中門、金堂に取り付く回廊、講堂に取り付く軒廊、経蔵、北僧房、北廊、食堂周辺など。
- \* 寺内各所の発掘調査……北西部倉垣院推定地で、瓦窯の痕跡。北東部での調査。南西部で八幡社本殿の調査。
- \* 寺内周辺部の発掘調査……慶賀門(東門)、北総門、北大門、東限築地など。

### 5. 東寺と西寺で発見された瓦 [表 2～4]

- ①平安時代前期初頭……東寺は、前都の搬入瓦と平安京近郊瓦屋の瓦を使用。  
⇨西寺は、前都の搬入瓦、平安京近郊瓦屋の瓦と、寺家瓦屋(枚方坂窯)の瓦を使用。  
⇒東寺は、前期中頃に寺内瓦屋(倉垣院推定地)で生産を始める。
- ②平安時代前期～後期……平安京周辺瓦屋の瓦を使用。  
⇒ 中期末から各地域瓦屋(山城幡枝・丹波・讃岐・播磨など)の製品が供給される。
- ③鎌倉時代初期……文覚主導による播磨の寺家瓦屋(明石林崎三本松窯)の瓦を搬入。
- ④室町時代以降……大和産瓦の使用。その後、山城産瓦を使用。

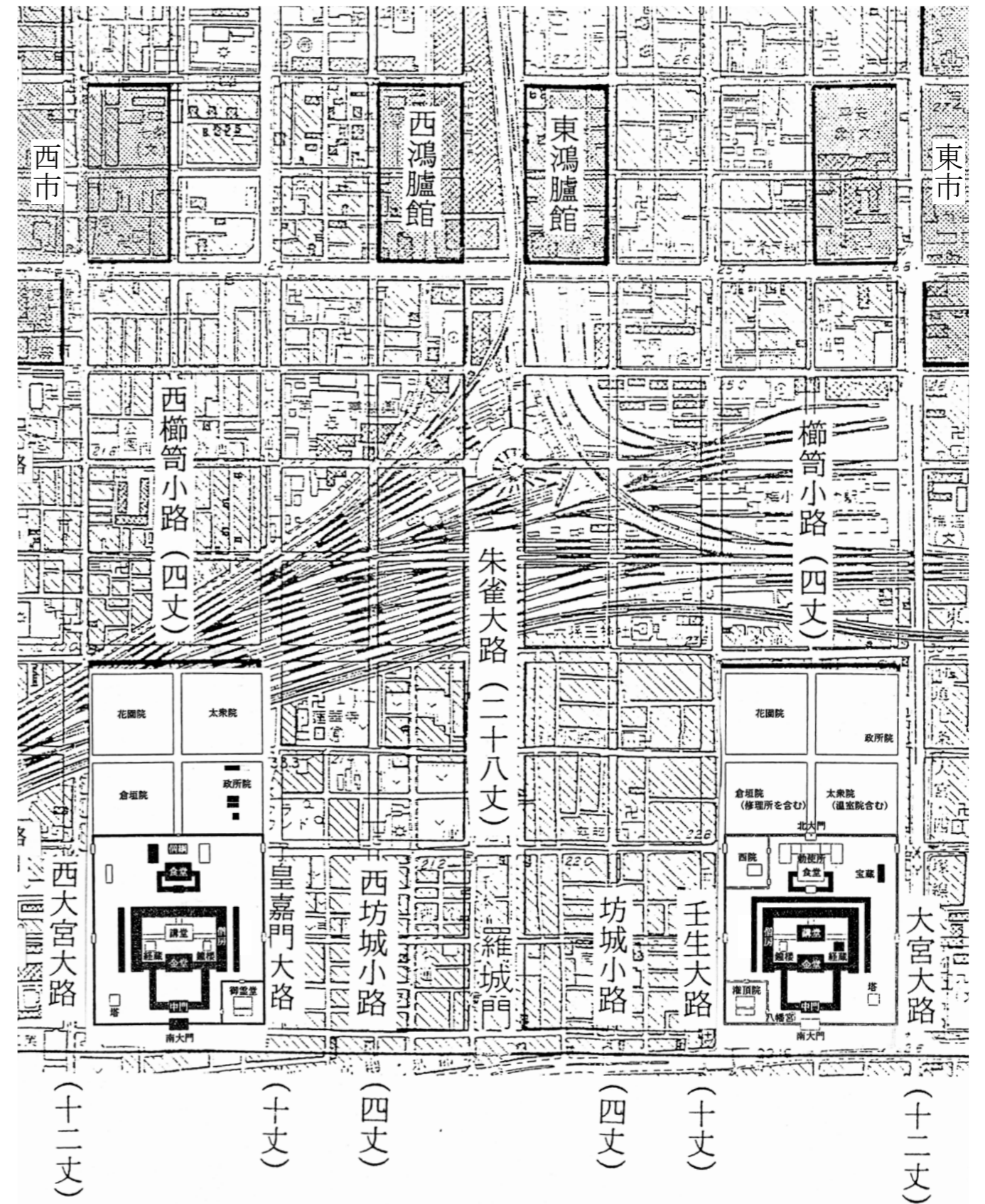


図 1 西寺・東寺と平安京

表1 東寺造営表 [作表にあたり、東寺宝物館1995『東寺の建造物』を参考にした。]

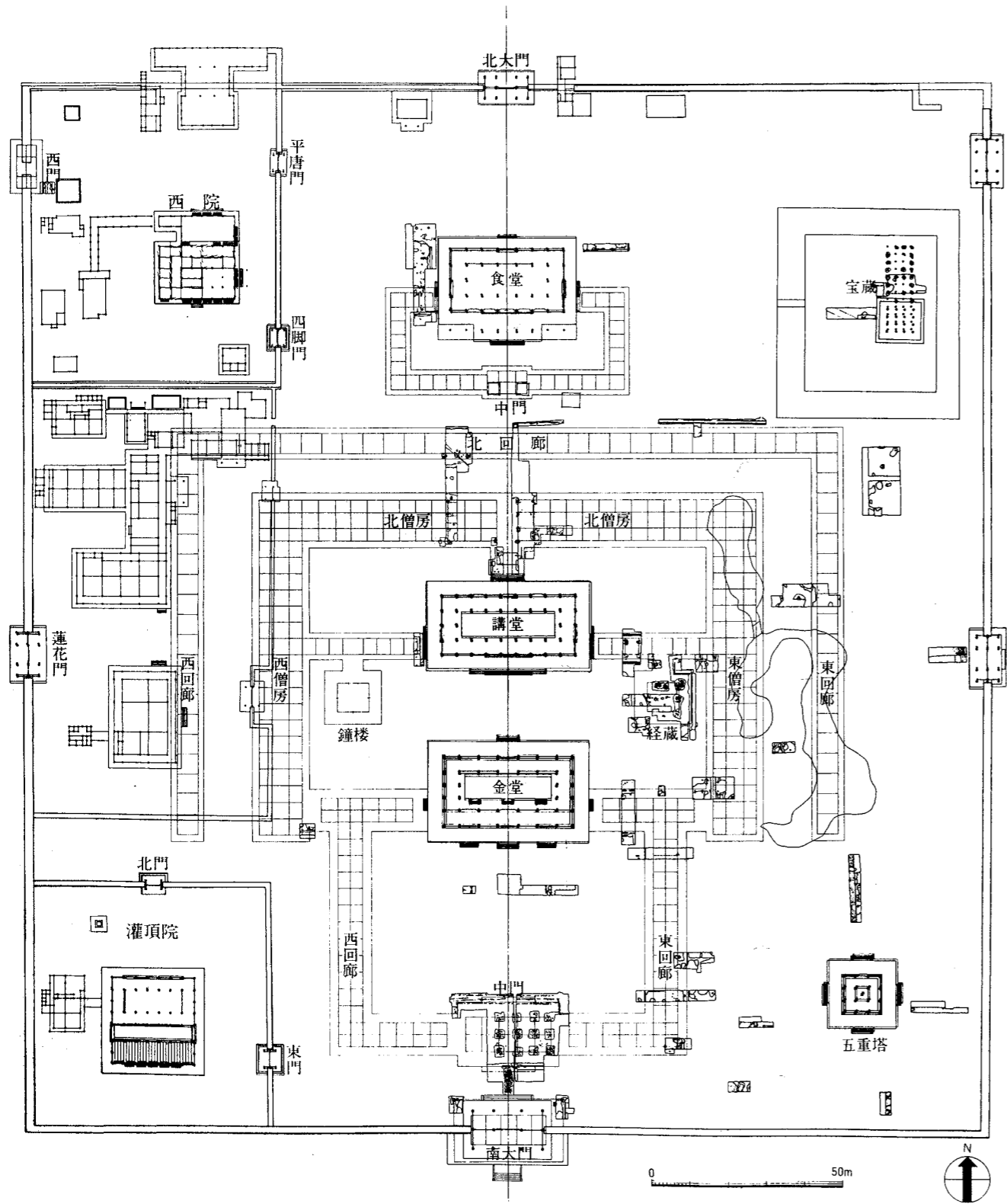


図2 東寺伽藍配置復原図

[杉山信三編『教王護国寺防災施設工事発掘調査報告』1981を一部改編]

時期	年代	南大門	中門	金堂	講堂	食堂	五重塔	西院	灌頂院	宝蔵	八幡社	僧回廊	東西門	北大門	北総門	その他
平安時代	794平安造営	不明	不明	796頃造営												
	800															
	空海下賜															
	900			918小破	839頃造営	843頃造営	元慶年中造営	823以後造営	843頃造営	不明	弘仁頃造営	不明				919経蔵あり
	1000				1069転倒修理	1075修理	1055焼亡		1068転倒	1000焼亡	1055焼亡	918小破		平安以前は穴門		1000築地類焼
鎌倉時代	1100		1077修造	1105修理		1086再建		1105僧房等新造	不明	1039盗難						
	1200	文覚修造	二天修復	文覚修造	文覚修造	1153修理	1170修理		1252焼亡	不明	文覚修造		文覚造営	文覚造営	文覚造営	1187鐘楼造営
南北朝時代	1300				1326修理	1270焼亡	1293再建	1233大師像安置	1252再建	1216盗難						1286大湯屋焼この頃築地瓦葺
	1400				1361傾く	1319修理	1319修理	1379焼亡	1317破損	1329強盗	1325修理					1359観智院造
室町時代	1486土一揆	1449破損	1486焼亡	1486焼亡	1486焼亡	1432修理	1432修理	1380再建	1462修理	1445大破	1486焼亡		1381西門立柱			1413築地修造
	1500	1486焼亡	1489仮屋	1486焼亡	1486焼亡	1491再建	1563焼亡	1390前堂新造	1477強盗	1486焼亡	1487再建					1486鐘楼経蔵焼亡
桃山	1596大地震	1501再建			1596転倒修造	1596転倒	1594再建	1596転倒	1564強盗	1487再建				1596転倒		1596鐘楼四面築地破損
	1600	1596転倒					1635焼亡		1664修理					1644修理		1644築地修理
江戸時代	1600	1605再建		1606再建	1655仮堂	1644再建		1634再建	1664修理							
	1700				1698修理	1692心柱切下	1732修造	1768修理	1766修理							
明治	1800					1775修理										
	1868	1868焼亡				1828再建				1868焼亡						1833北側に引屋
大正昭和	1900					1930焼亡										
	1895	1895移築解体修理		解体修理	解体修理	1933再建	解体修理		解体修理	解体修理			解体修理	解体修理	解体修理	
平成	1994	1994創建									1994再建					築地解体修理

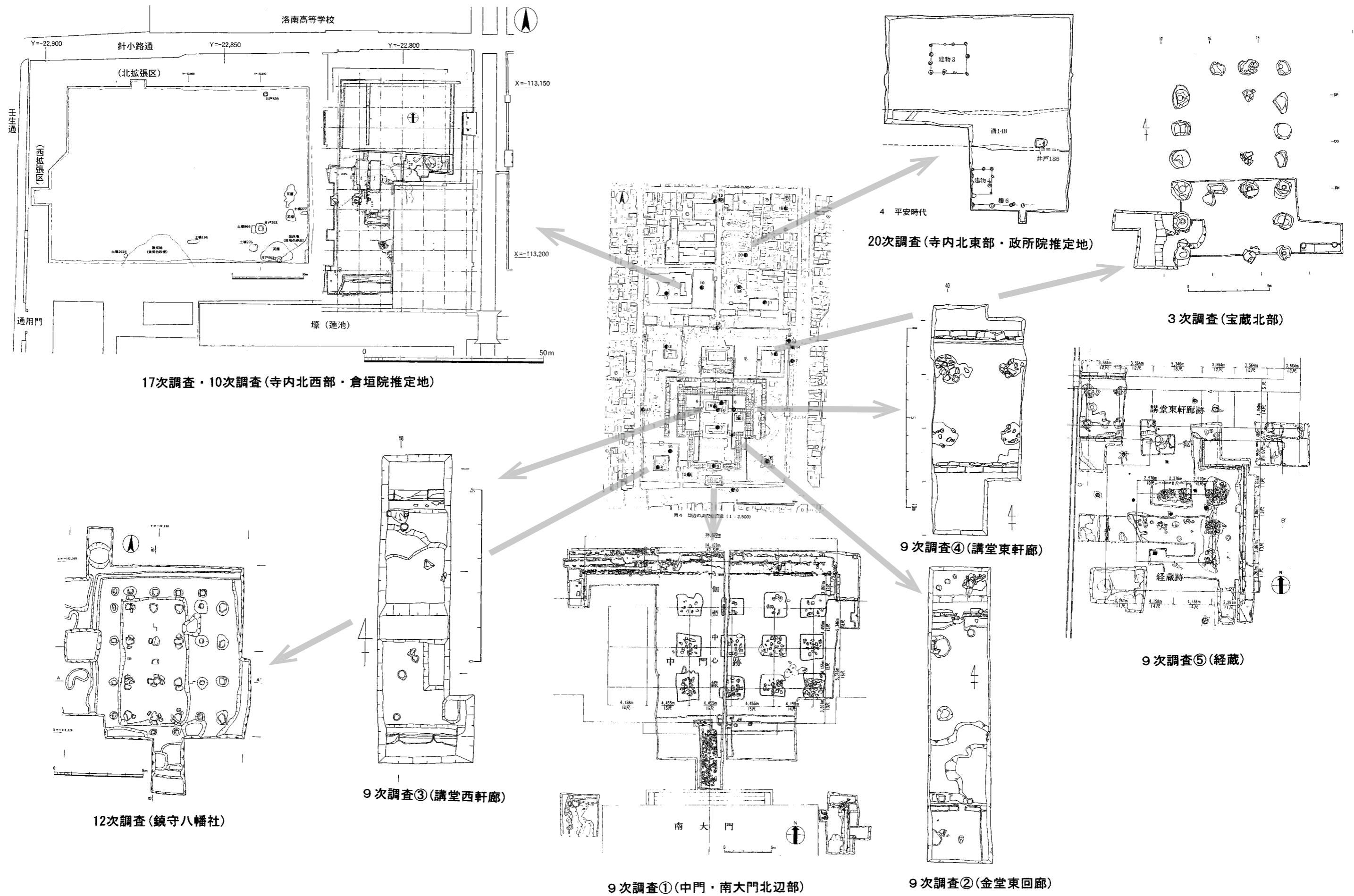


図3 東寺主要発掘調査平面図 [各調査報告書を一部改編]

表2 東寺・西寺略年表及び出土軒瓦変遷図1 (1:10)

瓦の時期	天皇	摂関上皇	主な出来事	東寺関連事項	西寺関連事項	東寺の瓦	西寺の瓦
奈良							
784 長岡京期	781 桓武		延暦3年(784)長岡京遷都。 延暦7年(788)最澄比叡山に院を建立。		延暦8年(789)3.16造東大寺司を廃す〔東大寺要録〕。		 平城京出土瓦
794 平安時代 前期 1段階	806 平城		延暦13年(794)10.22平安京遷都。 延暦23年(804)5空海入唐、 大同元年(806)10帰朝。天台宗公認される。	延暦15年(796)4.4大納言藤原伊勢人が造寺長官となる〔扶桑略記抄・帝王編年記〕。 延暦23年(804)4.8多治比眞人家継が造寺次官となる〔日本後紀〕。	延暦16年(797)4.4笠朝臣江人が造西寺次官となる〔類聚国史〕。 この頃から、西寺造営始まると推定。		 平城京出土瓦
808			大同3年(808)豊楽殿初見。 弘仁6年(815)1.21朝堂院修理。	弘仁3年(812)2.23東寺に屏風1帖・障子46枚施入、同年10.28造東西二寺諸司へ封戸2000戸支給、同年11.27布勢内親王墾田772町両寺に施入〔日本後紀〕。翌年1.19東西両寺で夏安吾始行〔日本後紀〕。 弘仁10年(819)頃、東西造寺司廃止して造寺所となる〔性霊集〕。	弘仁3年(812)2.23西寺に障子46枚施入、同年10.28封戸支給、翌年1.19安吾始行〔日本後紀〕。	 岡本遺跡出土瓦	 岡本遺跡出土瓦
前期 2段階	823 淳和		弘仁7年(816)空海金剛峰寺創建する。 同年羅城門倒壊。	弘仁14年(823)1.19空海、嵯峨天皇から東寺を賜る〔御遺告〕。同年10.10真言僧五十口を置き、他宗僧の雑住を禁ず〔類聚三代格〕。 天長元年(824)6.16空海東寺別当に補任〔長者補任〕。 天長2年(825)4.20講堂図新定〔長者補任〕。翌年11.24、空海塔婆の造営を勸進〔性霊集〕。	弘仁14年(823)1.19守敏、西寺を賜る〔春秋編年輯録〕。翌年6.16長恵が東寺から西寺別当に遷る〔春秋編年輯録〕。 天長2年(825)4.20講堂平面は東寺に準ずる〔東宝記〕。	 岡本遺跡出土瓦	 平城京出土瓦
826			承和2年(835)1平安宮真言院で御七日御修法始行する。	承和元年(834)12.24東寺三綱は真言僧から充てられることを上奏〔類聚三代格〕。翌年3.21、空海高野山で入定〔続日本後紀〕。 承和6年(839)6.15講堂仏像供養〔続日本後紀〕。	天長4年(827)頃までに北院造営〔僧綱補任〕。 天長9年(832)7.5講堂仏像供養〔日本紀略〕。 天長10年(833)頃には僧綱所が薬師寺から西寺に移されたと推定。 承和4年(837)6.26僧房初見〔続日本後紀〕。	 岡本遺跡出土瓦	 平城京出土瓦
833 仁明 850 文徳			承和14年(847)円仁帰朝し、『入唐求法巡礼行記』著す。	承和10年(843)11.16灌頂院で伝法灌頂・結縁灌頂始修〔続日本後紀・長者補任〕。	嘉祥3年(850)6.3利柱に落雷あり〔文徳天皇実録〕。 貞観2年(860)8.27文徳天皇国忌を行う〔延喜式〕。 貞観6年(864)2.16西寺僧綱所初見〔三代実録〕。	 岡本遺跡出土瓦	 平城京出土瓦
858 清和 876 陽成		858 藤原 良房 摂政	天安2年(858)藤原良房摂政となる。 貞観8年(866)応天門の変。			 岡本遺跡出土瓦	
879			元慶3年(879)朝堂院・大極殿再建。	元慶7年(883)2.7塔料として稻16000束・穀250石を充てる〔三代実録〕。 元慶年中(877~885)塔婆造営〔東宝記〕。 仁和2年(886)3.13新造塔損焼〔扶桑略記〕。 昌泰2年(899)頃食堂千手観音・四天王像造立〔聖宝僧正伝〕。 延喜元年(901)12宇多法皇伝法灌頂を受ける〔長者補任〕。	元慶6年(882)6.26塔料として稻6000束・穀250石を充てる〔三代実録〕。	 岡本遺跡出土瓦	
884 光孝 887 宇多 897 醍醐		887 藤原 基経	仁和3年(887)藤原基経関白となる。			 岡本遺跡出土瓦	
中期 1段階						 岡本遺跡出土瓦	
904	930 朱雀		延喜4年(904)仁和寺円堂院造営。	延喜10年(910)3灌頂院で御影供始行〔長者補任〕。	延喜6年(906)頃、聖宝が宝塔・中門・東院堂・諸仏造営〔醍醐寺縁起〕。	 岡本遺跡出土瓦	 醍醐寺出土瓦
						 岡本遺跡出土瓦	 醍醐寺出土瓦
						 岡本遺跡出土瓦	 醍醐寺出土瓦
						 醍醐寺出土瓦	 醍醐寺出土瓦
						 醍醐寺出土瓦	 醍醐寺出土瓦
						 醍醐寺出土瓦	 醍醐寺出土瓦

0 20cm

表3 東寺・西寺略年表及び出土軒瓦変遷図2 (1:10)

瓦の時期	天皇	摂関上皇	主な出来事	東寺関連事項	西寺関連事項	東寺の瓦	西寺の瓦
中期 2段階	946 村上			延喜18年(918)6.24 僧房落雷、金堂焦壞。〔扶桑略記〕。 延喜21年(921)10 空海、弘法大師の諡号を賜る〔日本紀略〕。	延長8年(930)9.29 醍醐天皇国忌〔日本紀略〕。 天曆3年(949) 西寺御靈堂初見〔北山抄〕。		
中期 3段階	961 967 冷泉 969 円融 984 花山 986 一条		応和元年(961) 内裏再建。 康保4年(967) 藤原実頼関白となる。以後、関白常置。	正暦元年(990)8 西寺焼亡の為、村上天皇国忌東寺に移す〔日本紀略〕。	康保2年(965) 西寺・法性寺で故中宮週忌の法要を行う。 正暦元年(990)2.2 西寺焼亡〔日本紀略・小右記〕。		
中期 4段階	1019 1011 三条 1016 後一条 1036 後朱雀 1045 後冷泉 1068 後三条 1072 白河	1017 藤原道長	寛仁3年(1019) 無量寿院(法成寺)造営。 延久元年(1069) 後三条天皇による庄園整理令・記録所設置。	長保2年(1000)11.25 南北宝蔵焼亡、南宝蔵の法具は取り出す、築地に類焼〔百合文書〕。 天喜3年(1055)8.23 落雷のため五重塔焼亡〔扶桑略記〕。 康平5年(1062)10.21 政所初見〔百合文書〕。	長保6年(1004)3.2 西寺綱所作料として、米1200石搬入〔御堂関白記〕。 寛弘8年(1011)12.7 南院初見〔権記〕。 保延2年(1136)12 南院焼亡〔百練抄〕。 長暦元年(1037)5.26 には僧綱所確認〔平記〕。		
後期 1段階	1077 1086 堀河 1107 鳥羽	1086 白河	承暦元年(1077) 法勝寺造営。 応徳3年(1086) 白河上皇院政開始。	応徳3年(1086)10.20 五重塔再建〔東寺塔供養記〕。			
後期 2段階	1102 1123 崇徳 1141 近衛	1129 鳥羽	康和4年(1102) 尊勝寺造営。 大治4年(1129) 鳥羽上皇院政開始。	康和5年(1105) 舍利会始まる〔東宝記〕。 大治2年(1127)3.9 宝蔵焼亡〔百練抄〕。 仁平元年(1151) 西寺荒廢の為、東寺で任僧綱行う〔僧綱補任抄出〕。			
後期 3段階	1157 1155 後白河 1158 二条 1165 六条 1168 高倉 1180 安德 1183 後鳥羽	1158 後白河	保元元年(1156) 鳥羽上皇没。その後、保元・平治の乱。 仁安2年(1167) 平清盛太政大臣となる。 治承4年(1180) 東大寺・興福寺焼亡。翌年重源東大寺再建。 寿永4年(1185) 源頼朝諸国に守護地頭設置。	応保元年(1161)7.4 東西寺で文殊会あり〔山槐記〕。 文治2年(1186)4.30 源頼朝、東寺などの社寺の修造を表明〔吾妻鏡〕。 文治5年(1189)12.24 後白河上皇、東寺を文覚に下し、播磨国を修造国とする〔東宝記〕。 建久2年(1191) 文覚を東寺修理上人に任命〔長者補任〕。	平治元年(1159) 贈大后懿子の国忌を行う〔師光年中行事〕。 応保元年(1161)7.4 東西両寺で文殊会あり〔山槐記〕。 寿永2年(1183)3 御説経会開催〔山槐記〕。		
中世 1期	1193 1198 土御門	1198 後鳥羽	建久3年(1192) 後白河院没、源頼朝鎌倉幕府開く。 承久3年(1221) 承久の乱。六波羅探題設置。	建久4年(1193)1.14 源頼朝、東寺修造料として播磨国を寄進〔吾妻鏡〕。 その後、建久10年(1199)まで、金堂・五重塔等・灌頂堂等修理、諸門造営〔東宝記〕。 天福元年(1233)10.15 弘法大師像を西院不動堂に安置、その後御影堂と呼ばれる〔長者補任〕。	建久年中(1190-1199) 文覚による塔婆修理〔明恵上人行状〕。 承元元年(1207)4.4 藤原定家、塔を見る〔明月記〕。 天福元年(1233)12.24 塔婆焼亡〔明月記・百練抄〕。		
1236			嘉禎2年(1236) 東福寺造営。	延応2年(1240) 頃から宣陽門院により庄園等などが施入される〔東宝記〕。			

表4 東寺・西寺略年表及び出土軒瓦変遷図3 (1:10)

瓦の時期	天皇	摂関上皇	主な出来事	東寺関連事項	西寺関連事項	東寺の瓦	西寺の瓦
中世2期	1318 後醍醐	1301 後宇多	正慶2年(1333)鎌倉幕府滅亡。建武元年(1334)建武中興。	建長4年(1252)9 灌頂院焼亡、同年12 再建〔東宝記〕。文永7年(1270)4.29 五重塔焼亡、永仁元年(1293)再建供養〔長者補任〕。この頃、後宇多法皇、後醍醐天皇により庄園などが施入される〔東宝記〕。			
中世3期	1335		建武2年(1335)臨川寺造営。明徳3年(1392)南北朝合一。	建武3年(1336)6.14 足利尊氏、東寺に本陣を置く〔東寺略史〕。この頃、足利尊氏により庄園が施入される。観応3年(1352)頃、梶山が『東宝記』編纂〔東宝記〕。延文4年(1359)観智院造営〔東宝記〕。康暦元年(1379)12.4 西僧房から出火、西院・小子坊・僧房二宇・東西唐門・西大門等焼亡、翌年再建〔東宝記〕。			
中世4期	1397		応永4年(1397)北山殿造営。	応永20年(1413)頃、四面築地修理〔教王護国寺文書〕。			
中世5期	1478		応仁・文明の乱(1467~1477)起こる。文明10年(1478)山科本願寺造営。	文明18年(1486)9.13 土一揆のため、金堂・講堂・鐘楼・経蔵・鎮守・回廊・僧坊・中門・南大門等焼亡〔百合文書〕。その後、中門・僧房・回廊は未再建。延徳3年(1491)2.18 講堂再建〔醍醐寺文書〕。永禄6年(1563)4.2 五重塔焼亡〔言継卿記〕。永禄11年(1568)9.26 織田信長東寺に陣を置く〔東寺略史〕。	大永7年(1527)10.24 西寺に陣が置かれる〔二水記〕。		
近世1期	1586		天正14年(1586)聚楽第造営。天正18年(1590)豊臣秀吉統一。	文禄3年(1594)7.27 五重塔再建〔義演准后日記〕。			
近世2期	1592		天正20年(1592)伏見城造営。慶長8年(1603)江戸幕府を開く。この頃蓮華王院・方広寺造営・整備、慶長10年(1605)蓮華王院西門上棟。	文禄5年(1596)⑦.13 地震のため、食堂・中門・講堂・灌頂院・南大門等転倒〔義演准后日記〕。慶長11年(1606)9 豊臣秀頼の発願により金堂再建〔義演准后日記〕。寛永11年(1634)3 灌頂院再建〔長者補任〕。寛永12年(1635)12.7 塔婆焼亡、同21年(1644)7 徳川家光の発願により再建〔続史愚抄〕。貞享2年(1685)加賀藩前田綱紀が文書収納桐箱を百合寄進〔箱裏書〕。文政11年(1828)食堂再建〔東寺文書〕。			
近世3期 近世4期	1695 1765						
近代	1867 明治 1912 大正 1926 昭和 1989 平成		明治元年(1868)明治政府成立。同年神仏分離令発布。昭和5年(1930)12 食堂焼亡。昭和15年~平成年間に建物解体修理を実施、それに伴い発掘調査も実施。昭和47年(1972)から本格的発掘調査始まる。平成4年(1994)八幡社再建。平成7年(1995)創建1200年法会、『新東宝記』出版。この頃、諸門・諸像修理。平成6年(1994)世界文化遺産に登録。平成23年(2014)『百合文書』が世界記憶遺産に推薦。	明治元年(1868)10.21 南大門・八幡社・楼門・八島社焼亡。明治28年(1895)10 蓮華王院西門を南大門として移築。昭和34年(1959)から発掘調査始まる。			

【凡例】  
 \* 拓本・実測図は縮尺1:10である。  
 \* 略年表は、東寺編『新東宝記』1994年などを参考にした。  
 \* 拓本・実測図は、植山茂「東寺の瓦、西寺の瓦」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』1993年、森郁夫・鈴木久男・上村和直・前田義明「瓦」『新東宝記』1994年、及び各調査報告書などを一部改編して使用した。  
 \* 東寺の調査次数は京都市埋蔵文化財研究所報告『東寺』2009-13、西寺の調査次数は京都市埋蔵文化財研究所報告『西寺』2007-4による。

東寺  
 1・3~5・7~10・30・32・33・36~43・51~53・56~60・69・71:9次調査  
 2・11・34・50・54・55・61・62・75・78:12次調査  
 6・31・68・70・72・79~81:解体修理・伝世品  
 12~16:10次調査  
 67・73・74・76・77:17次調査  
 82:20次調査

西寺  
 17・19:2013年調査  
 25:22次調査  
 26:19次調査  
 27・29・35・44:24次調査  
 48・49:木村捷三郎採集品  
 66:9次調査  
 18・20~24・28・45~47・63~65:植山報告